「おさしづ」語句の探求（最終回）

「おさしづ」における「道」の用例まとめ②

天理大学人間学部講師
おやさと研究所兼任研究員
澤井　治郎　*Jiro Sawai*

「おさしづ」においては、明治21年4月に東京府で教会設置が認可されるころから、「道」という言葉が多く見られるようになっている。これは、示唆的なことである。教会設置が認可されるということは、「天理教会」あるいは「天理教」が世の中に誕生するということである。「天理教会」という制度ができると、教会に所属しているか、していないかという、内と外の境界が明確になる。

前回の連載のおわりに、次の「おさしづ」を引用した。

> 天理王命と称するは、一つの宗旨である。天理王命と元一つ称するは、天の月日である。元一つ始めるは女一人である。元よく聞いてくれ。長々元一つ分からなんだ。未だ〳〵ほんの一寸の初まりである。危なき道や〳〵思えども、何にも危なき道やない。何ぼ往還道でありても、心に誠無うては通れようまい。心に誠一つさいあれば、何にも危なきはない。楽しみ一つの道やある、と、諭してくれるよう。（さ21・7・31　中台勘蔵願）

「宗旨」というのは、宗派などの所属を表す言葉で、明治の初めごろは、religionの翻訳語としても使われた。したがって、この引用の冒頭部分を現代風に言い換えると、天理王命と称する一つの宗教（つまり、天理教）ができている、と意訳することもできるだろう。この「おさしづ」においては、その元となっている道を通るように諭されている。その道を通るためのキーワードとなっているのは、「誠一つ」ということである。

「おさしづ」における「天理教」「天理教会」

「おさしづ」における「天理教」と「道」の意味合いを比べるために、「天理教」「天理教会」の用例をいくつか列挙する。

> さあ〳〵天理教会やと言うてこちらにも始め出した。応法世界の道、これは一寸の始め出し。神一条の道は、これから始め掛け。元一つの理というは、今の一時と思うなよ。今までに伝えた話、かんろだいと言うて口説き口説き詰めたる。さあ〳〵これよりは速やか道から、今（いま）んまにかんろだいを建てにゃならん、建てんならんという道が今にあるという。（さ22・4・18　刻限御話）

> まあよいは〳〵人気々々、世界々々、誰々天理教会には押し手は無い。事情は皆世界で集まりたる処、これで盛大や〳〵と思う心が間違う。……めん〳〵真実誠一つの理を立て、艱難の道も忘れてはどうもならん。世上明るい道でも何時暗がりとも分からん。これまでの道を忘れぬよう。忘れさえせにゃようようの道は許してある。神一条より外の道は通れようまい。（さ24・7・23　本席御身上御障りにつき御願）

> 世界盛大、天理教盛大、たゞ一つ元出してみよ。（さ27・11・17　昼のおさしづにより夜深教長外五名にて御願）

> 天理教会と言うて、国々所々印を下ろしたる。年限経つばかりでは楽しみ無いから、一時道を始め付けたる。神一条の道からは、万分の一の道を付けたのやで。（さ30・7・14　安堵村飯田岩治郎神様下られる様申されるは道具主でも出られるや如何と心得まで願（前日御願通りだん〳〵信徒へ及ぼす故心得まで願））

> 日々世界天理教ほんに偉いものや、と言うようになったは容易やない。内々から元の事掴まえどこ無いようになってから、何と沖へ突き流されたようになってから、どうするか。何の理があるか。（さ34・5・25　昨日より本席御身上大変のぼせると仰せあり、御障り中本日朝増井りん教祖赤衣仕立て下されし事に付申し上げ下され、それよりだん〳〵御話ありて本部員残らず寄せと仰せあるにより、一同打ち揃い御話（御敷布団しかず御坐りでおさしづ））

このように、「天理教」ないし「天理教会」は、「応法世界の道」、「皆世界で集まりたる処、これで盛大や」、「世界盛大、天理教盛大」、「世界天理教ほんに偉いものや、と言うようになった」とあるように、いずれも世界（社会）の側の視点で言われている。その視点は盛大とか人気という言葉から分かるように、多くの人が天理教に集まっているという事実に向けられている。

一方で、「おさしづ」では、そうした「天理教」の状況について、「神一条の道からは、万分の一の道を付けた」だけであり、「神一条の道は、これから始め掛け」とか、「たゞ一つ元出してみよ」とか、「神一条より外の道は通れようまい」というように、「天理教」の元にある神一条の道を通るようにと諭されている。さらに、「かんろだいを建てにゃならん」「真実誠一つの理を立て」とも説かれている。

「道」の諭し

このように「天理教」と「道」を並べてみてくると、「天理教」は世界（社会）にあり、「道」は一人ひとりの心や行いのなかにある、と言えるのではないだろうか。そうした場合、「道」が「天理教」とは異なる特徴の一つとして、内側と外側の区別が非常に曖昧であるということが挙げられる。「天理教」の一員であるかどうかは、さしあたり教会の構成員であるかどうかによって判断できるが、道を通っているかどうかは、一人ひとりの心遣いや行いのなかにのみ基準があることになる。

親神の思召に沿う道は、どのような道であるかが問題である。まず、第一に挙げられるのが、神一条ということである。今回引用した中にも何度も出てきたことである。さらに、元ということが強調され、何もないところから教祖が教え、付けられた道であること、それは艱難苦労の道であり、これからの歩みを進める上でも、それを忘れてはいけないということが、「おさしづ」全体を通して繰り返し諭されている。

この道を通る心構えとしては、「誠一つ」であることが説かれる。「誠一つ」とは、「おかきさげ」や『信者の栞』によれば、「かしもの・かりもの」の理を心に治め、八つのほこりを角目に心のほこりを払い、たすけ一条に生きることである。最終的に、「道」の諭しは、いつもこのことを説かれている。